雨降りしきる、13番線

AGO!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨降りしきる、１３番線

【Ｎコード】
Ｎ０６３３Ｐ

【作者名】
ＡＧＯ！

【あらすじ】

～その日は、雨が降っていた～

日常で起こる様々な出来事を、あなたはどんな風に感じますか？

良いこともあれば、悪いこともある。

どうせなら、どんな事があっても前向きに生きたいものです。

階段を駆け降りる。
駅構内に響きわたる発車の合図が、僕をより一層焦らせた。

「うわっ」

滑って転げ落ちそうになるのを必死に耐えて、駆け降りる。
『大事な用があるときに限って、寝坊するなんて…』と一瞬、後悔の念が頭を過ったが、そんなことを考えている場合でもなかった。

最後の2、3段をジャンプして飛び降り、ようやくホームに辿り着いた。
が、健闘も虚しく、扉は閉まり、肩で息をする僕を置いて、電車は悠々と目的地へ向けて走り始めた。
僕は思わず『待って！』と口走りそうになったが、自制心がそれを押し止め、代わりに「はぁ」という溜息がこぼれた。
そして改めて、後悔の念が頭を駆け巡った。

重くなった足をパンパンと叩き、次の電車の時刻を確認する。
そこで僕は30分近く待たなければならないのを知り、2度目の溜息をついた。

「絶対怒られるよ…なぁ」

鬼の形相で怒る顔が容易に想像できた。
とは言っても遅刻してしまうことは、もはや決定事項であり、次に僕が取るべき行動は1つしかなかった。
鞄を開け、お目当ての品を探す。

「携帯、携帯…あれ？」

鞄の中を探しても、ズボンのポケットを探しても、お目当ての品は見つからなかった。
連絡手段さえも持ち合わせていないことを知り、３度目の溜息をつきそうになるが必死で我慢する。
今日はついていない。
そして今の自分に出来ることが、次の電車を待つことと、こみ上げてくる焦燥感を静めることしかないのが分かり、飲む気もしない珈琲を買うため自販機へと向かう。

自販機の前で僕は、財布を取り出しながら、空を見上げた。
昨晩から降り始めた雨が、今日も降り続いていた。
天気予報によれば、雨は週末まで続くらしい。
それにしても、ここ最近の天気はどこかおかしい。
一昨日まであんなに晴れていたかと思えば、昨日からはこの天気だ。
気温もグッと下がって、上着が必要不可欠である。
寒がりの僕としては急に寒くなるなんて、ましてや雨が降るなんて勘弁願いたい。
ヒューと風が吹く。
僕は上着の襟を正した。

財布から小銭を取り出し、自販機に入れながら品定めをする。
僕は隅っこの方へ追いやられた温かい飲物の中から、いつも飲む珈琲を選んだ。

「ガコンッ」

しゃがみながら、よっこいしょ、と世間で言うところの『おじさん』ワードを意識的に言う。

「いや、まだおじさんっていう歳じゃないから」

自販機から出てきた缶を取り出す。
その暖かな温もりが手に伝わり、少しホッとした。
そして、おつりを回収する。

もう一度言う、今日はついていない。
回収したはずのおつりは、僕の手からするりと滑り落ち、自販機の下へと一目散に逃げていってしまった。

「あっ…あぁ」

必死で我慢した3度目の溜息がこぼれ落ちる。
僕はその場から少しの間、動くことが出来なかった。
しばらくして立ち上がった僕は、とぼとぼとホームに設置されたイスへ向かった。

『おじさん』ワードを言いながら腰かける。
そして買ったばかりの温かな珈琲を口へと運ぶ。
口の中いっぱいに広がる珈琲の香りで、どんよりとした気分が少しだけ紛れた気がした。

そっと、目を閉じる。
気まぐれにホームへ吹き込んだ風が、珈琲の香りを空高く舞い上げた。

僕の周りを様々な音が飛び交う。
昨日観たＴＶ番組の話。
上司に対する愚痴。
駅アナウンス。
談笑する若者達。
世知辛い世に対する不満を言う老人達。
しとしと降る雨の音。

僕は目を閉じたまま、深呼吸した。
さっきまでいっぱいだった珈琲の香りは、もうどこかへ去ってしまったようだ。
そのかわりに、今度は雨の香りが胸いっぱいに広がった。
どこか懐かしいその香りは、僕を安心させた。
僕の周りを飛び交う音がフェードアウトしていく。
そして、しとしと降る雨の音だけが僕の耳に届いていた。

「１３番線に列車が参ります。黄色い線の内側でお待ち下さい。」

ハッと、目を開ける。
そしてすぐさま腕時計を確認する。
どうやら、さらなる遅刻は避けられたようだ。
僕はホッと溜息をつく。
そして順序よく並んだ列の後ろに急いで並んだ。
電車の扉が開くと同時に人々が動き出す。

僕はその流れに乗って電車に乗り込む。
幸い、乗車している人は少なく、イスに座ることができた。

人の流れが一段落する。
僕はふと後ろを振り返り、車窓から空を見上げた。
まだ雨は降り続いていたが、束の間に現れた雲の切れ間から太陽の光が差し込んでいた。
それを見て僕は深く息を吸い込み、体勢を戻しながら、また目を閉じる。
それと同時に電車の扉が閉まった。

「さて、おもいっきり怒られてきますか」

僕を乗せた電車が走り始める。
駅構内には、しとしと雨が太陽の光で、キラキラと輝きながら降り注いでいる。

雨降りしきる、１３番線にもう一度、気まぐれ風が吹き込んだ。

（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。
是非、感想をお聞かせ下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0633p/

雨降りしきる、13番線

2010年11月22日02時58分発行